

# ベクトル空間の基底に関する定理について

大矢 浩徳 (OYA Hironori)\*

以下では  $\mathbb{K} = \mathbb{R}$  または  $\mathbb{C}$  とする.

本資料では第 10 回講義資料で証明を省略した定理 10.8 と定理 10.9 について証明を与える. 以下に基底の定義と定理 10.8, 定理 10.9 を再掲しておこう.

## 定義 10.4

$V$  を  $\mathbb{K}$  上のベクトル空間とする.  $V$  の部分集合  $B$  が次の性質 (b1), (b2) を満たすとき,  $B$  を  $V$  の基底 (basis) という.

(b1)  $B$  は一次独立である.

(b2)  $B$  は  $V$  を生成する. つまり,  $\text{span}_{\mathbb{K}} B = V$  である.

## 定理 10.8

$n$  を正の整数とする.  $V$  を  $\mathbb{K}$  上のベクトル空間とする.

このとき,  $V$  のある基底が  $n$  個の元からなるとすると,  $V$  の任意の基底の元の個数は  $n$  個である.

## 定理 10.9

$V$  を  $\mathbb{K}$  上の  $\{0\}$  でない有限次元ベクトル空間とし, その次元を  $n$  とする. このとき, 以下が成立する:

- (1)  $V$  の  $n$  個の元  $v_1, \dots, v_n$  が  $V = \text{span}_{\mathbb{K}}\{v_1, \dots, v_n\}$  を満たすとき,  $\{v_1, \dots, v_n\}$  は  $V$  の基底となる. つまり, 一次独立性 (基底の定義条件 (b1)) は自動的に満たされる.
- (2)  $k \leq n$  とし,  $v_1, \dots, v_k$  を一次独立な  $V$  の元の組とする. このとき, 適切に  $V$  の  $(n-k)$  個の元  $v_{k+1}, \dots, v_n \in V$  が存在して,  $\{v_1, \dots, v_k, v_{k+1}, \dots, v_n\}$  が  $V$  の基底となるようにできる. 特に,  $V$  の  $n$  個の元  $v_1, \dots, v_n$  が一次独立であるとき,  $\{v_1, \dots, v_n\}$  は  $V$  の基底となる. つまり, 生成性 (基底の定義条件 (b2)) が自動的に満たされる.

定理 10.8 の証明.  $n$  個の元からなる  $V$  の基底を  $B = \{b_1, \dots, b_n\}$  とする. さらに  $V$  の基底を任意にとり,  $B'$  とする. (この時点では  $B'$  の元の個数は  $n$  個とは限らず, 無限個の可能性もあることに注意する.) そこで,  $B'$  の元の個数が  $n$  個であることを示せばよい.

基底の定義条件 (b2) より, ある  $p_{ij} \in \mathbb{K}$  ( $i = 1, \dots, m, j = 1, \dots, n$ ) と相異なる  $b'_1, \dots, b'_m \in B'$  が存在して,

$$b_j = \sum_{i=1}^m p_{ij} b'_i, \quad j = 1, \dots, n \quad (*)$$

と書ける. 基底の定義条件 (b2) より,  $V$  の任意の元は  $b_1, \dots, b_n$  の一次結合で書けるので, (\*) より,  $V$  の任意の元は  $b'_1, \dots, b'_m$  の一次結合で書ける. ここで,  $b'_1, \dots, b'_m$  は基底  $B'$  の相異なる元であることから, 一次独立であることにも注意すると,  $\{b'_1, \dots, b'_m\}$  は基底の定義条件 (b1), (b2) を満たすので,  $V$  の基底となる. さらに,  $B'$  に  $b'_1, \dots, b'_m$  以外の元が存在するとすると, その元は  $b'_1, \dots, b'_m$  の一次結合で書けることから,  $B'$  が一次独立な集合であることに反する. よって,  $B' = \{b'_1, \dots, b'_m\}$  であり, 特に  $B'$  は有限集合である.

\* e-mail: hoya@shibaura-it.ac.jp

ここで、再び基底の定義条件 (b2) より、ある  $q_{ij} \in \mathbb{K}$  ( $i = 1, \dots, n, j = 1, \dots, m$ ) が存在して、

$$\mathbf{b}'_j = \sum_{i=1}^n q_{ij} \mathbf{b}_i, \quad j = 1, \dots, m \quad (**)$$

と書ける。行列の記法を用いると、(\*), (\*\*) は以下のようにまとめられる：

$$P := \begin{pmatrix} p_{11} & p_{12} & \cdots & p_{1n} \\ p_{21} & p_{22} & \cdots & p_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ p_{m1} & p_{m2} & \cdots & p_{mn} \end{pmatrix} \quad Q := \begin{pmatrix} q_{11} & q_{12} & \cdots & q_{1m} \\ q_{21} & q_{22} & \cdots & q_{2m} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ q_{n1} & q_{n2} & \cdots & q_{nm} \end{pmatrix}$$

として、

$$\begin{aligned} (\mathbf{b}'_1 \cdots \mathbf{b}'_m)P &= (\mathbf{b}'_1 \cdots \mathbf{b}'_m) \begin{pmatrix} p_{11} & p_{12} & \cdots & p_{1n} \\ p_{21} & p_{22} & \cdots & p_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ p_{m1} & p_{m2} & \cdots & p_{mn} \end{pmatrix} = (\mathbf{b}_1 \cdots \mathbf{b}_n), \\ (\mathbf{b}_1 \cdots \mathbf{b}_n)Q &= (\mathbf{b}_1 \cdots \mathbf{b}_n) \begin{pmatrix} q_{11} & q_{12} & \cdots & q_{1m} \\ q_{21} & q_{22} & \cdots & q_{2m} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ q_{n1} & q_{n2} & \cdots & q_{nm} \end{pmatrix} = (\mathbf{b}'_1 \cdots \mathbf{b}'_m). \end{aligned}$$

これより、

$$(\mathbf{b}'_1 \cdots \mathbf{b}'_m)PQ = (\mathbf{b}'_1 \cdots \mathbf{b}'_m), \quad (\mathbf{b}_1 \cdots \mathbf{b}_n)QP = (\mathbf{b}_1 \cdots \mathbf{b}_n).$$

となる。いま、 $PQ = (r_{ij})_{i,j=1,\dots,m}$  とすると、成分ごとに見て上の左の式は、

$$\sum_{i=1}^m r_{ij} \mathbf{b}'_i = \mathbf{b}'_j, \quad j = 1, \dots, m$$

を意味するが、 $\mathbf{b}'_1, \dots, \mathbf{b}'_m$  らの一次独立性より、 $r_{ij} = \begin{cases} 1 & i = j \text{ のとき} \\ 0 & i \neq j \text{ のとき} \end{cases}$  となり、 $PQ = I_m$  であることがわかる。

全く同様に、 $QP = I_n$  である。

さて、 $\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix}$ ,  $\mathbf{y} = \begin{pmatrix} y_1 \\ \vdots \\ y_m \end{pmatrix}$  に関する連立一次方程式  $P\mathbf{x} = \mathbf{0}_m$ ,  $Q\mathbf{y} = \mathbf{0}_n$  を考える ( $\mathbf{0}_m, \mathbf{0}_n$  はそれぞれ  $m$  次,  $n$  次零ベクトル)。すると、

$$\begin{aligned} P\mathbf{x} = \mathbf{0}_m &\Rightarrow QP\mathbf{x} = Q\mathbf{0}_m \Rightarrow I_n\mathbf{x} = \mathbf{x} = \mathbf{0}_n, \\ Q\mathbf{y} = \mathbf{0}_n &\Rightarrow PQ\mathbf{y} = P\mathbf{0}_n \Rightarrow I_m\mathbf{y} = \mathbf{y} = \mathbf{0}_m, \end{aligned}$$

となるので、これらの連立一次方程式の解の自由度は 0 で、解は一意に定まることがわかる。これより、 $\text{rank}(P) = n$ ,  $\text{rank}(Q) = m$  となる (ここでは、この証明の後にある定理※を用いた)。今、 $P$  が  $m \times n$  行列、 $Q$  が  $n \times m$  行列であることに注意すると、 $n = \text{rank}(P) \leq \min\{m, n\} (\leq n)$ ,  $m = \text{rank}(Q) \leq \min\{m, n\} (\leq m)$  なので、 $n = \min\{m, n\} = m$ 。

$m$  は基底  $B'$  の元の個数であったことを思い出すと、示すべきことは示された。  $\square$

上の証明中では以下の定理を用いた。これは線形代数 I の範囲であるので、思い出しておいてほしい (第 1 回本レポート課題解答問題 7 補足解説参照)。

定理※ (線形代数 I の範囲)

$A$  を各成分が  $\mathbb{K}$  の元の  $m \times n$  行列とする. このとき,  $\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix}$  に関する連立一次方程式

$$A\mathbf{x} = \mathbf{0}_m$$

の一般解に現れる必要最小限のパラメータの数 (= 解の自由度) は  $n - \text{rank } A$  である. 特に, この解が任意定数を含まない場合  $n = \text{rank } A$  である.

定理 10.9 の証明.

(1)  $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$  が一次独立であることを示せばよい,  $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$  が一次従属であるとする, ある  $(c_1, \dots, c_n) \neq (0, \dots, 0)$  が存在して,

$$c_1\mathbf{v}_1 + \dots + c_n\mathbf{v}_n = \mathbf{0}$$

となる. このとき,  $c_k \neq 0$  となる  $k$  をとると,

$$\mathbf{v}_k = -\frac{1}{c_k}(c_1\mathbf{v}_1 + \dots + c_{k-1}\mathbf{v}_{k-1} + c_{k+1}\mathbf{v}_{k+1} + \dots + c_n\mathbf{v}_n)$$

となるので,  $\{\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_{k-1}, \mathbf{v}_{k+1}, \dots, \mathbf{v}_n\}$  も  $V$  をベクトル空間として生成する.

ここで,  $\{\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_{k-1}, \mathbf{v}_{k+1}, \dots, \mathbf{v}_n\}$  が再び一次従属であるとする, 上と全く同じ議論を繰り返すことで,  $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_{k-1}, \mathbf{v}_{k+1}, \dots, \mathbf{v}_n$  からさらに 1 つ元を取り除いてもそれらが  $V$  をベクトル空間として生成するようにできる. この操作を繰り返して, 一次独立な集合になるまでベクトルを取り除いてゆき, その最終結果を  $\{\mathbf{v}_{i_1}, \mathbf{v}_{i_2}, \dots, \mathbf{v}_{i_\ell}\}$  (元の個数は  $\ell$  個) とする. (元が 1 つだけになると必ず一次独立なので, この取り除く操作は必ずどこかで終了する.) 元を取り除いているので,  $\ell < n$  であることに注意する.

このとき, 上のアルゴリズムから  $\{\mathbf{v}_{i_1}, \mathbf{v}_{i_2}, \dots, \mathbf{v}_{i_\ell}\}$  は  $V$  をベクトル空間として生成し, かつ一次独立であるので  $V$  の基底である. しかし, 定理 10.8 より元の個数が  $n$  より少ない基底は存在し得ないので, これは矛盾である. よって,  $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$  は一次独立である.  $\square$

(2)  $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_k$  に  $V$  の元をいくつか加えて  $V$  の基底が得られるのであれば, 定理 10.8 より, 加えるベクトルの数は  $(n - k)$  個なので, 示すべきことは  $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_k$  に  $V$  の元をいくつか加えて  $V$  の基底が得られるという事実である.

さて,  $V$  の基底を任意に 1 つとり,  $\{\mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_n\}$  とする.  $\{\mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_n\} \subset \text{span}_{\mathbb{K}}\{\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_k\}$  とすると,  $V = \text{span}_{\mathbb{K}}\{\mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_n\} \subset \text{span}_{\mathbb{K}}\{\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_k\} \subset V$  となるので,  $\text{span}_{\mathbb{K}}\{\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_k\} = V$ . いま,  $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_k$  は一次独立でもあるので, このとき  $\{\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_k\}$  は  $V$  の基底となり, 特に  $V$  の元を加える必要はない ( $k = n$ ).

次に,  $\{\mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_n\} \not\subset \text{span}_{\mathbb{K}}\{\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_k\}$  とすると, ある  $1 \leq \ell \leq n$  が存在して,  $\mathbf{b}_\ell \notin \text{span}_{\mathbb{K}}\{\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_k\}$  となる. このとき,  $\mathbf{b}_\ell, \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_k$  は一次独立となることを証明する. ある  $c, c_1, \dots, c_k \in \mathbb{K}$  に対し,

$$c\mathbf{b}_\ell + c_1\mathbf{v}_1 + \dots + c_k\mathbf{v}_k = \mathbf{0}$$

となったとすると,  $c \neq 0$  のとき,  $\mathbf{b}_\ell = -\frac{1}{c}(c_1\mathbf{v}_1 + \dots + c_k\mathbf{v}_k)$  となるので,  $\mathbf{b}_\ell \in \text{span}_{\mathbb{K}}\{\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_k\}$  となって矛盾. よって,  $c = 0$  であるが, このとき  $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_k$  の一次独立性より,  $c = c_1 = \dots = c_k = 0$  である. よって,  $\mathbf{b}_\ell, \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_k$  は一次独立となる.

$\{\mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_n\} \subset \text{span}_{\mathbb{K}}\{\mathbf{b}_\ell, \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_k\}$  のとき, 上と全く同じ議論により,  $\{\mathbf{b}_\ell, \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_k\}$  は  $V$  の基底となる. もし,  $\{\mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_n\} \not\subset \text{span}_{\mathbb{K}}\{\mathbf{b}_\ell, \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_k\}$  のときも, やはり上の議論を繰り返して,  $\mathbf{b}_{\ell'} \notin \text{span}_{\mathbb{K}}\{\mathbf{b}_\ell, \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_k\}$  なる  $\mathbf{b}_{\ell'}$  を  $\{\mathbf{b}_\ell, \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_k\}$  に添加し, より大きな一次独立集合を作る. この操作を次々に繰り返すと  $\{\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_k\}$  に  $\{\mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_n\}$  の元をいくつか ( $\mathbf{b}_{\ell_1}, \dots, \mathbf{b}_{\ell_s}$  とする) 付け加えたところで  $\{\mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_n\} \subset \text{span}_{\mathbb{K}}\{\mathbf{b}_{\ell_1}, \dots, \mathbf{b}_{\ell_s}, \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_k\}$  となる. このとき上のアルゴリズムから,  $\{\mathbf{b}_{\ell_1}, \dots, \mathbf{b}_{\ell_s}, \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_k\}$  は一次独立で, しかも  $V$  をベクトル空間として生成するので,  $V$  の基底となる (定理 10.8 より  $s = n - k$ ). よって示すべきことは示された.  $\square$